

## 被災者に思いを寄せて

東日本大震災が発生して以来10日が過ぎましたが、被災地では、食料品や医薬品・ガソリンなどの燃料などが不足しており、依然として厳しい環境にあります。

被災地の状況は、テレビなどの報道でしか知り得ませんが、ただ心配するだけで、せいぜい献金をするぐらいしかできない自分の無力さを感じています。

この10日間の状況を振り返って強く感じることは、一部では食料や燃料の買い占めといった行動がありましたが、総じて人々は抑制のきいた、冷静な行動を取っているということです。

暴動も略奪も起きていませんし、寒風の中炊き出しに整然と並んで待っている、こうした様子に諸外国からは賞賛の声が寄せられています。私達には、日本という社会の中で生き、生かされてきた、その長い年月のあいだに自分のDNAに刻み込まれている特性があるのだと感じますし、その事は誇りにして良いと思います。

被災地では、被害を受けた子どもたちが、避難場所での不便な生活を強いられながら、自らボランティアとして様々な活動をしています。先日も、「肩たたき隊」という小さな子どもたちがお年寄りの肩をたたいて回っている様子がテレビで放送されていました。

子どもたちの健気な様子に、誰しものが感動したのではないかと思います。子どもたちのために頑張らねば、と思う大人がいるでしょう。同時に、子どもたちの笑顔に癒されている大人もいるでしょう。

大人たちは、日を追うごとに、これからの生活のことなどへの不安が大きくなっていると思いますが、子どもたちの存在は、周りの大人たちに生きる力や勇気を与えていると強く感じています。

震災発生後10日が過ぎ、被災地では、行方不明者の搜索と共に、がれきの後片付けや仮設住宅の建設など、復旧に向けた取組も始まっています。被災者同士が助け合いながらこの困難を乗り越えようとしていますし、ボランティアはじめ多くの支援も届き始めています。今後、復興に向けて着実に動き始めることを期待しています。

我が国は世界でも有数の地震国であり、これまでも数々の大地震に見舞われ、大きな被害を被ってきましたが、その都度、被災地は苦難を乗り越えてきました。

大事なことは、国民一人ひとりが、被災者に思いを寄せながら、自分に出来る支援をしていくことだと思います。そうすれば、震災のあった日にも新しい命が誕生しましたように、日本は、必ずや蘇ると確信しています。

(塾頭 吉田 洋一)